Ⅳ-128　アンケート調査に基づくリゾート行動に関する実証的分析

立命館大学理工学部　正　員　春名　攻
立命館大学大学院　学生員　山田　孝弘
立命館大学大学院　学生員　○越名　健

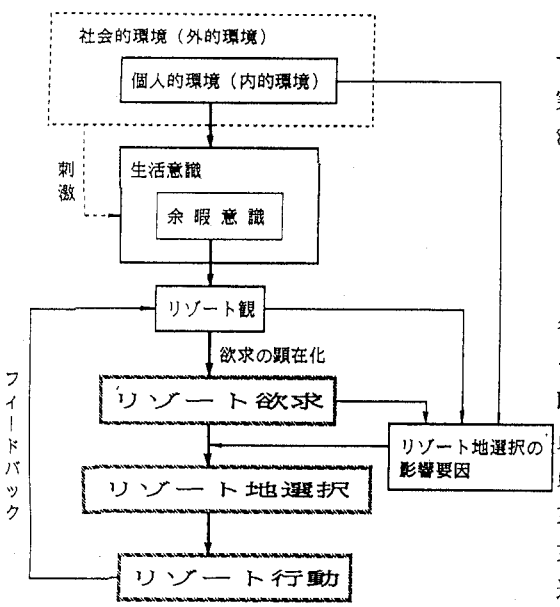
１．はじめに

近年わが国では、全国各地で地域振興のためのリゾート開発が脚光を浴びている。本研究では、より効果的なリゾート開発を行うためには、新規に需要を創造することや潜在的需要を顕在化していくような需要者側からのアプローチが重要であり、その方法として、リゾート客のリゾート行動の解明が有効であると考えた。そこで、リゾート行動に関するアンケート調査のを行い、リゾート行動の解明のための分析を行った。

２．アンケート調査の概要

（１）リゾート行動仮説の概略

本研究では、アンケート調査を実施するうえの前提条件として、人々のリゾート行動仮説を次のように設定した（図－１）。まず、人々は様々な要因で構成されている社会的環境（外的環境）の中で、様々な刺激を受けながら各々の属性である個人的環境（内的環境）を形成していき、これらがその人々の価値観や行動様式に影響を与えているという仮定をたてた。そして、リゾート行動に関わるものとして、まず、生活意識が、社会的環境（外的環境）から情報などの刺激を受けながら存在するものとし、そのうちの余暇に対する意識がリゾートに向けられたときに始めて、情報あるいは過去の経験などに基づいてリゾート観が形成されると考えた。そして、様々な条件をクリアーすることでリゾート欲求は顕在化すること、さらには、個人的環境やリゾート観や欲求の度合から設定される要因に影響されてリゾート地を選択するとともに、リゾート行動に移ることと仮定し、その行動の評価・判断はリゾート観にフィードバックされるものとした。



図－１　リゾート行動の顕在化プロセス

（２）アンケート調査

調査項目は、前述の行動仮説に沿って設計した。その内容は、個人属性、リゾート観、リゾート欲求意識、そしてリゾート地を選択する際に考慮した事柄、等々から構成した。これらの調査を平成２年１２月から平成３年１月の期間に近畿圏の企業に勤務する２０歳以上の男女およびその家族を対象にして実施し、その結果、有効サンプル数３５５部(回収率82.2%）を得た。

（３）調査結果

ａ)個人属性

回答者の特徴としては、性別および年齢別にみると、２０歳代、３０歳代、４０歳代、５０歳以上の各年代層の男女がほぼ平均的な割合で分布しており、それぞれの意見を反映した調査結果が期待できる。職業については、男性のほとんどが会社員・団体職員であるのに対し、女性は２０歳代においては会社員が60.1 %と大部分を占めているが、３０歳以上の女性については半数が定職を持っていないために、女性について、仕事および余暇活動に関する意識の違うデータの出ることが期待できた。

ｂ)リゾート観およびリゾート行動意識

リゾート地に行くことに対する質問に対して大部分の85.6%が「条件が整えば行ってみたい」と回答しており、また、近い将来（１・２年以内）のリゾート地に行く予定については、86.6%とほとんどが「予定がある」と解答している。従って、リゾート行動の制約条件を探索し、その条件を考慮したリゾート開発をおこなうことで、潜在的リゾートニーズを顕在化へと高めることができると考えた。

３．リゾート地選択に関する分析

（１）一次分析

本研究では、リゾート行動仮説におけるリゾート地選択段階に注目し、この段階に直接に影響する要因を「個人の状況」、「リゾート地までのアクセス条件」、「リゾート地の資源及びその特性」に３分類して、その優先順位をつけた。さらにそれぞれの項目に影響の度合を１から５に取り平均を出した。優先順位１位の「個人の状況」においては、「リゾート地での滞在日数」、「リゾート行動に使う全費用」が影響の強い項目として挙げられ、リゾート地を選択する際にも時間面および金銭面がかなり重要な要因であることがわかった。次に優先順位が２位の「リゾート地の資源及びその特性」については、「自然資源の魅力」、「リゾート地の雰囲気」が挙げられ、その具体的な魅力として、「景観の美しさ」、「清潔できれいな雰囲気」といった精神的、感覚的な満足を望んでいることがわかった。優先順位３位の「リゾート地までのアクセス条件」については、交通費と同レベルで移動の不快さを意識していることが推測できた。

（２）高次分析結果

ここでは、リゾート意識に関する質問で「条件が揃えば行ってみたい」と回答したサンプルについて、リゾート地選択の直接要因に関して年齢を外的基準とした数量化Ⅱ類による分析をおこなった（表－１）。分析の結果、年齢による意識の違いの最も大きい要因は、「自然資源」、「リゾート行動にかかる全費用」、「スポーツやレクリエーション等のリゾート施設」、「宿泊施設」の順となった。また、各年代別に、自然資源に関する意識やその捉え方には、若年層ほど自然の広大さを魅力に感じること等、かなりの差が生じる事がわかる。さらに、単純集計により全体的に交通費と宿泊費を優先する傾向にあるものの、２０代の男女および３０代の男性ではリゾート地での活動費を、また３０代の男女および４０代男性では飲食費を最も優先するという具合いに、層ごとに意識の違いが現れている。また、スポーツやレクリエーション等のリゾート施設および宿泊施設においても、結果より年代別により利用目的および意識の差が出てきていることが推測できた。

４．おわりに

本研究では、リゾート開発を効果的に行うためにはリゾート客のリゾート行動を解明することが重要であると考えた。そこで、アンケート調査結果に基づいて各種の分析を行い、リゾート地選択構造を策定するための情報を得ることができた。

今後は、本分析の成果を踏まえ、さらに詳細な調査分析をおこなうことにより、リゾート行動メカニズムの解明のための研究を進めていく予定である。

表－１　リゾート地選択の直接要因に関する数量化Ⅱ類による分析結果

相関比　0.3245

アイテム	カテゴリー	度数	ウエイト	範囲（順位）	偏相関係数（順位）
全費用がどのくらいになるか	影響する	203	0.0857	1.6553(2)	0.107083(11)
	どちらでもない	26	-0.1864		
	影響しない	8	-1.5695		
自然資源の魅力	影響する	212	-0.0913	1.7287(1)	0.108954(10)
	どちらでもない	17	0.3679		
	影響しない	8	1.6374		
スポーツ等のリゾート施設の充実性	影響する	130	-0.5919	1.6345(3)	0.316750(1)
	どちらでもない	79	0.6045		
	影響しない	28	1.0426		
リゾート地全体の雰囲気	影響する	195	0.1384	1.0083(6)	0.166056(3)
	どちらでもない	31	-0.8699		
	影響しない	11	-0.0012		
宿泊施設の魅力	影響する	185	0.0133	1.6189(4)	0.149689(4)
	どちらでもない	37	0.4197		
	影響しない	15	-1.1992		
空港が整備されていること	影響する	101	0.3758	1.2397(5)	0.207549(2)
	どちらでもない	90	0.0199		
	影響しない	46	-0.8639		